



京街道守口宿、文禄堤&太陽の塔内部見学の記録

- 1 : 日時 2019年2月28日
- 2 : 集合場所 京阪守口市駅 10時
- 3 : 天気 雨のちくもり
- 4 : 参加者 浅野、植田、大石、叶、上條、金戸、小松、坂根、西井、
秦、原、日景、藤井、前野、李三、山田、山本、倭、(18名)
お友達参加—加藤、斉木、渡辺 (敬称略) 計21名

守口市駅で守口門真歴史街道推進協議会のガイドさん2人(うち一人は退職した学校の先生)と合流し、概要を説明していただいて、雨の中文禄堤へと出発。

*文禄堤：文禄3年に秀吉が毛利3家や淀家に命じて淀川の改修工事を行い、修築させたもので、河内平野への氾濫を防止するのに役立った。さらに堤防の上は大阪～京都を結ぶ京街道として(すなわち伏見城と大阪城を最短距離で結ぶ道)整備し交通の要所となった。なお堤の上に住んでいたのは全国でここ守口だけで、非常に珍しいそうだ。



*東海道57次：東海道は53次ではなく、伏見宿、淀宿、枚方宿、守口宿を合わせて57あり、伏見宿から4宿は京街道四宿である。徳川の治世になり東海道と称されるようになったと思われる。

*守口宿：慶応4年鳥羽の戦いの後、明治天皇が京都を出て、大坂に向かうことになり、守口宿に三種の神器とともに宿泊。このとき大坂遷都の計画があったとされているが、結局東京に都が遷ることに。



*難宗寺：浄土真宗の蓮如上人が1477年(文明9年)開基。西御坊と称される

明治天皇の御座所が残されている。境内には大阪府天然記念物の、樹齢500年といわれる大銀杏があり、風格のある堂々たる姿を見ることが出来る。

ガイドさんの熱演のあまり少々時間がおしてしまったので、途中カットし、モノレール大日駅へと雨の中急ぎ足で向かう。昼食をイオンモールで各自すませ本日のメインである太陽の塔に向かう。

2時10分過ぎから入場開始。



「明治大帝玉座」の前で

太陽の塔内部見学

1970年開催された万国博覧会を象徴するアイコンとして建設され、おそらく日本人のほぼ全てに知られている建造物で、岡本太郎氏によって考案された。

高さは70m、腕の長さは25mあり、外観で3つの顔を持っている。〈太陽の顔〉は現在を、頂部の〈黄金の顔〉は未来を、背面の〈黒い太陽〉は過去を表わしている。さらに地下展示として〈地底の太陽〉（巨大な仮面）が存在した。

この4番目の顔は人間の祈りや心の源を表わすとされていた。しかし博覧会終了後行方不明になり、2018年の公開にあわせて現在のテクノロジーを用いて復元された。

塔内部には展示空間があり、41mの巨大造形〈生命の樹〉がそびえていた。

生命の樹は生命の進化をあらわす系統樹で、おそらく岡本太郎氏は提唱者のヘッケルの本を読んでいたものと推察できる。292体の生き物たちの像が、原生類、三葉虫、魚類、両生類、爬虫類、哺乳類に時代わけされて展示されていた。また一部は電子制御で動いていた。現在は183体で、153体が新規作成、29体が修復されたもので構成されている。ゴリラのみ修復せず、当時のままの姿で展示されている。そのため頭部はなくぼろぼろで、すこし気の毒？かも。

ちなみに爬虫類時代に展示されているブロントサウルス（最近分類学上也めているが）は、一度も生命の樹から降りたことが無いそうで、1トンもの重量を支えてきた設計には驚かされた。しかもかつてはモーターで呼吸していたそうです！



50年ほど前に、生物学的進化なんか超越した過去、現代、未来をみすえ、表現しようとした芸術家-岡本太郎って、すごい一言です。大阪の人間として1970年万博を経験している世代として保存していかねばと思いました。

3時半に太陽の塔前にて解散。

(写真 坂根、叶 文責 倭)